

柳川先生をめぐる2、3の告白

島 蘭 進

(昭和49年修士修了)

【握手】

柳川先生の話術に魅せられたことのない方は少ないだろう。先生のさまざまな「術」は関西文明の伝統に由来するものなのだろうか。あるいは、天性のセンスによるものなのだろうか。ところが、教えを受けるがわの私は、「術」をみるとそのからくりを口に出してみたくなる性悪のマジメ人間である。先生の「術」に対しても、私はそうした態度をとりがちであった。にもかかわらず、私は容易に先生の術中にはまってしまうのであった。一例が先生の握手である。それは、いつも思いがけなくやってくる。そして、先生の厚く丸い背中とともに私を暖かくくるんでしまうかのように感じられるのである。大人に反抗する子供の姿勢に固執しているような者にとっては、とくにそうであった。

【ホモ】

私が学部時代に出席した柳川先生の演習の一つは、「柳田国男と折口信夫」に関するものだった。この演習で私は折口信夫について報告し、それがきっかけとなって修士論文では折口信夫をテーマにした。加藤守雄描くところのホモの師、折口信夫は、私の頭にくっきりやきついていた。ところ

で、柳川先生はホモについての冗談がお好きである。しかし、困ったことに、そのたびに私は、先生と私の関係がホモの関係であるかのような錯覚をもってしまうのだ。それは、私にとっても困ったことであったが、もちろん先生にとっても困ったことだったと思う。ちなみに、折口信夫によれば、師弟関係の本質はおたがいの魂をこいもとめることだというのであるが。

【叱責】

柳川先生が学生を叱られるなど、多くの方には想像もつかないことではなかろうか。しかし、私はいくどか叱られたことがあるのである。いや、それとなくお諭しをうけたというべきであろう。たとえば、先生の演習に出席率が悪かったことがある。そして、自分の発表の番がまわってきた週に久しぶりに出席して、前の学生の発表に対してとうとうわが卓見をまくしたてたのである。ついで、私が発表するために、前の席に移ろうとする時、先生はそっと「今度はゆっくり言いたいことを、言って下さい」といわれた。もちろん私は、学生諸氏の前で恥しい思いをせずすんだ。私の廉恥心が作動しはじめたのは、演習がおわってしばらくしてからであった。